

文学作品の用例から探る応答表現「ええ」の様相 —谷崎潤一郎『痴人の愛』—

金山 泰子 二宮 理佳

[要旨]

本研究は、応答表現「ええ」の発話者の性差による異同、女性発話による「ええ」の特徴について考察するものである。分析対象は谷崎潤一郎『痴人の愛』の「ええ」の用例である。

調査の結果、女性発話による「ええ」は、常体会話でも敬体会話でも使用される一方、男性発話による「ええ」は、敬体発話内でのみ使われていることが明らかとなった。さらに、女性発話による「ええ」に後続する文の文末には、「わ」「の／のよ」「の」などの終助詞が共起する用例が多いことがわかった。これらの終助詞は、女性的特徴を表す役割語として認識されている。こうした女性語との結びつきが強い「ええ」もまた、女性性を表象する役割語としての機能を一部有しているのではないかということが示唆された。

[キーワード]

ええ 性差 敬体会話 常体会話 役割語

1. はじめに

応答表現「ええ」は、「はい」と共に、日本語教育の現場において初級レベルの早い段階から現れる表現であり、一般的には「はい」よりややカジュアルな肯定表現という認識で取り上げられているが、その違いについては詳しくは言及されていない(二宮・金山 2008)。研究においては、「はい」との比較という視点から、「ええ」の機能を「同意応答」(北川 1973、日向 1979)、「参加・強調」(McGloin 1997)とする先行研究があり、肯定以外の機能も見出されている。高橋(1999)は、英語との比較を通して、「はい」は、話し相手の視点に配慮して用いられる「外心的」な表現であるのに対し、「ええ」は「内心的」であると述べている¹。石田(2005)は、ニュージーランド人日本語学習者の相づち「ええ」に関する知識を調査し、「会話の改まり度」や「社会的距離」の解釈に関して、母語話者との相違点を指摘した。

このように、「はい」と「ええ」の比較、または相づちとしての「ええ」を対象とした研究は散見される。また「はい」「うん」「そう」等に着目した研究も見られる(富樫 2002 他)。しかし、応答表現の「ええ」のみを対象とした研究は管見では僅少である。

そこで筆者らは、先行研究をふまえた上で、アンケート、インタビュー、教科書分析、漫画、テレビ番組、文学作品など、様々な媒体を使用して、「ええ」の機能についての調査研究を試みてきた(二宮・金山 2006 他)。その過程において、文学作品中の用例を対象とした分析の中で、谷崎潤一郎『痴人の愛』の作品中に「ええ」が多用されてい

ることを見出した。さらに、男性発話者と女性発話者の「ええ」の使用に違いが見られ、女性発話者が使用する「ええ」には終助詞「わ」「よ／のよ」「の」がたびたび共起する傾向が見られた。

そこで本稿では、谷崎潤一郎の作品『痴人の愛』に表れる応答表現「ええ」について、男性発話者・女性発話者に分けて用例を分析する。女性発話者の「ええ」と男性発話者の「ええ」の違いに着目することにより、「ええ」の機能をさらに浮き彫りにすることが本稿の目的である。

まず、なぜ文学作品の用例を分析対象として選んだのかについて述べておきたい。文学作品においては、作者が時代や社会背景をふまえて、登場人物の性別、性格、社会的属性、年齢、他人物との関係性などに配慮しつつ緻密に人物像を作り上げ、言葉を精査した上で用いていると考えられるからである。ただし、本調査で扱うのは『痴人の愛』一作品のみからの用例であるため、「ええ」の機能を明らかにするためには用例数も限られており、また一作家の一作品であることから、作家特有の文体的特徴が全く影響していないとは言い切れない。したがって、今後、時代別・作家別・作品別にデータ収集を拡張することによって「ええ」の様相を多角的に考察する必要がある。本調査の分析結果はその端緒として位置付ける。

なお、本調査の目的は谷崎作品の文体の特徴を考察することではない。あくまでも「ええ」の機能を明らかにするための考察の対象として文学作品中の用例を分析する。

以下では、筆者らのこれまでの調査研究から浮かび上がってきた成果・課題について整理する。そして『痴人の愛』の用例分析結果を報告し、考察を進める。

2. 研究背景

本節では、本研究の基盤となった筆者らのこれまでの調査概要を紹介する。

2-1. これまでの調査結果

まず、二宮・金山（2006）では「はい」のみ使用可能な文例、「はい」「ええ」が共に可能な文例について分析し、「はい」との対比を通して「ええ」の機能について考察した。その結果、「はい」「ええ」の使い分けには対話者が共有する情報の度合いが深く関与していることが分かった。

金山・二宮（2007）のアンケート調査では、非母語話者と母語話者の「はい」「ええ」に関する認知・解釈、使用状況を比較し、「ええ」の機能について再考察を試みた結果、次の点が見出された。「ええ」にはかなりの幅があり、個々の意識によってその使い方・捉え方が異なるということである。このような幅広さは、何を基準に「ええ」と「はい」の使い分けをしているかという点に関係していると思われる。つまり、人によって、または状況によって、待遇や丁寧さや改まり度に意識を置くか、相手との関係を意識するか、話者の気持ちの表明を重視するか等々が異なるため、使い方・受け取り方に幅が出てくるのではないかと考察した。

さらに金山・二宮（2009）の研究では、母語話者を対象に漫画を使用したアンケートを実施・分析した結果、「はい」「ええ」の使い分けの要因を「話者の気持ち」とした

回答が多く見られ、特に「ええ」の選択理由には、「話者の気持ち」、「話者のイメージ」、「『ええ』が持つイメージ」という回答が多かった。また「ええ」は「yes (肯定) + α 」で、その α の部分が人によって、また状況によって異なるという結果が得られた。

また二宮・金山 (2013) では、「ええ」の持つ「yes + α 」という点に着目し、文学作品の用例を挙げつつ考察を試みた結果、「ええ」の後に「まあ」「あの」などの表現を伴って、躊躇・迷い・ごまかしなどを表す機能、逆接系接続詞「でも」「けれども」などを伴って、断り・反対意見などを表明する機能が浮かび上がってきた。さらに、後続文を伴わなくとも、「ええ」という表現そのものに発話者の感情・意見・主張が込められるのではないか、という示唆が得られた。

以上に述べたこれまでの調査の中で、2009 年の調査結果は特に本研究との関係性が見出される。2009 年の調査では、被験者から「ええ」は特定のイメージがあるというコメント、「女性」「性別」に関するコメントが散見されたからである。次節ではこの調査結果の詳細をまとめる。

2-2. 「ええ」が持つイメージ

金山・二宮 (2009) の調査では、複数の漫画の吹き出しを空欄にし、「はい」「ええ」のどちらが入るか質問し、さらにその使い分けの要因について被験者にコメントを求めた。「はい」「ええ」の使い分けの要因についてのコメントを、「関係」「場面・場所・状況」「話題」「話者の気持ち」「性別」「イメージ」に分類したところ、「ええ」には「女性っぽい」「女性的」「夫婦間で女性としてのジェンダーを表す」など「性別」に関するコメントが見られた。一方「はい」を選んだ要因には、性別に関するコメントは見られなかった。この結果は、「ええ」が女性語としてとらえられている可能性があることを示唆していると考えられる。また、「ええ」のイメージに関して、以下のようなコメントが見られた (原文ママ、下線筆者)。

「女性の年齢と品から」
「年配の人で古き良き日本というイメージ」
「山の手の奥様風」
「全体的に上品な言葉遣い」
「電話口でハイソな人は他人に距離をとる『ええ』を使う」
「気取っている」
「えらっそうな態度に『ええ』って言葉がばっちり合いそう」
「お蝶夫人²だから」
「サザエ³のキャラ」

下線は筆者らが付したものであるが、これらのコメントからも、複数の被験者が「ええ」を女性的な表現としてとらえていることがわかる。特に「お蝶夫人だから」「サザエのキャラ」というコメントからは、「ええ」が特定の女性人物のキャラクターのイメージと結びついていることを示唆している。また、この調査において「ええ」の「イメージ」に

ついでのコメントは、「はい」の「イメージ」についてのコメントの3倍以上あった⁴。このことから、「ええ」を使用する決定要因として「イメージ」が大きく影響していることがわかる。

以上の調査結果を踏まえ、本調査では文学作品の用例を対象とし、「ええ」の性差による使用例の違いに着目することとする。以下では本調査の目的・対象・方法について述べ、調査結果をまとめる。

3. 調査の目的・対象・方法

3-1. 目的

本稿では、谷崎潤一郎の作品『痴人の愛』に表れる応答表現「ええ」について、男性発話者・女性発話者に分けて用例を分析する。女性発話者の「ええ」と男性発話者の「ええ」の違いに着目することにより、「ええ」の機能をさらに浮き彫りにすることが本稿の目的である。なお、本稿の目的は谷崎の文体的特徴を明らかにすることではない。「ええ」の機能を明らかにするための分析対象の一つとして扱う。

3-2. 対象

本調査の対象は、谷崎潤一郎の『痴人の愛』である。『痴人の愛』は、1924年3月から『大阪朝日新聞』に連載、6月から10月までいったん中断したが、後半は『女性』誌に1925年7月まで掲載された。本調査で用いたのは、新潮文庫の平成25年版である。大正モダニズムを背景に、河合譲治という20代後半のエンジニアの青年と、カフェで女給として働く15歳の少女ナオミとの夫婦生活を描いたものである。以下に物語のあらすじをまとめる。

主人公の河合譲治は、栃木県の富裕な農家の長男で、東京の高等工業を卒業した後、電気会社でエンジニアとして勤務している。会社では「君子」とあだ名で呼ばれるほど、質素で真面目で凡庸な28歳の青年である。彼は、たびたび通う浅草のカフェで女給として働く15歳の西洋風の美少女ナオミに興味を抱く。ナオミは浅草の銘酒屋の娘で、女学校には行けずゆくゆくは芸者にさせられる身の上であった。譲治は、ナオミを自分の理想どおりの女性に育てようと考えて引取り、英語や音楽などを習わせる。ナオミは成長するにつれて複数男性との浮気をくりかえし、譲治を一時は激怒させるが、ナオミの美しさに抗えない譲治は、最後はナオミの言いなりになる。

ナオミの自由奔放な言動やファッションは、当時「ナオミズム」という流行語を生み出した。「大正時代のモダンガール」という女性のイメージが色濃く描かれており、女性性が強く現れている作品であると考えられるため、女性による「ええ」の用例を分析する対象として適切であると考え、使用することとした。

3-3. 方法

調査の方法は以下の通りである。

- 1) 作品中に表れる「ええ」の用例を全て抽出し、発話者ごとにまとめた。
- 2) 「ええ」が出てくる発話の直前の会話文を「先行文」として示した。またその発話

者も付記した。

- 3) 「ええ」を含む会話文をそのまま抜き出し「応答表現+後続文」として示した。
- 4) 「ええ」を含む会話文については、以下の2点に着目した。
 - ①文体（敬体か常体か）
 - ②文末に現れる終助詞（「わ」「よ／のよ」「の」）

上記の情報を一覧化したものが添付資料1である。次節では、発話者の性差により、「ええ」を含む会話文の文体はどのように異なるか、また性差による表現の異同が見られるかを、用例を挙げつつ分析する。

4. 調査結果

4-1. 「ええ」を含む会話文の性差による異同

「ええ」を含む会話文の文体が、男性発話者と女性発話者によって異同があるかを調査したところ、以下のような傾向が見られた。女性発話者は、常体（普通体/カジュアルな会話）においても（32用例）、敬体（「です・ます」体の会話）においても（3用例）、「ええ」を用いていた⁵。一方、男性発話者は、敬体（「です・ます」体の会話）の中でしか、「ええ」を用いていなかった（21用例）。以下の表を見られたい。

表1：男女別「ええ」を含む会話文の文体

| 発話者 \ 文体 | 敬体 （「です・ます」体の会話） | 常体 （普通体/カジュアルな会話） |
|----------|---------------------|----------------------|
| 男性 | ○ | × |
| 女性 | ○ | ○ |

以下に女性発話者が「ええ」を使用している会話文の用例を示す。なお、用例に付した下線は筆者によるものである。

用例1

【場面】 ナオミを引き取って、「結婚」とは違った遊びのような生活を送りたいと考えている譲治は、彼女の望みや好みを聞き出して、同棲生活に誘おうとする。

譲治（男）「じゃあナオミちゃんは、本を読むのが好きなんだね」

ナオミ（女）「ええ、好きだわ」

用例2

【場面】 用例1の会話の続く場面である。ナオミは譲治に引取られ世話されることを受け入れようとする。

譲治（男）「じゃあ、奉公を止めると云うのかい」

ナオミ（女）「ええ、止めるわ」

上記2例は、女性による発話で、「ええ」と常体（普通体／カジュアルな会話）が使われている例である。次に、女性による発話で、「ええ」と敬体（「です・ます」体の会話）が使われている例を以下に示す。

用例3

【場面】 ダンスホールに出かけた譲治とナオミは、菊子という若い女性に会う。ナオミは、容貌が猿に似た菊子を嘲るように、故意に猿の話題を持ち出す。

菊子（女）「あら、猿を飼っていらっしゃるの？」

ナオミ（女）「ええ、飼っておりますの、菊子さんは猿が好き？」

用例4

【場面】 譲治はナオミに誘われてダンス教室に通い始める。その教室の生徒たちであるジェイムズ・ブラウン夫人(日本人女性)と杉崎女史が、戸惑う譲治に声をかける。

ジェイムズ・ブラウン夫人（女）「あなた、失礼でございますけれど、ダンスのお稽古をなさいますのは、フォイスト・タイムでいらっしゃいますの？」

杉崎女史（女）「ええ、お始めてでございますの」

以上の用例に見られるように、女性による発話では「ええ」は、常体、敬体のいずれにおいても使われている。

次に、以下に男性発話者による「ええ」の用例を示す。

用例5

【場面】 大学生の浜田は、ナオミが譲治と結婚していることを知らずに付き合っていた。ナオミが他の大学生とも関係を持っていることを知って傷つくと共に、譲治に対する罪悪感を持ち、謝罪を求めに来る。

譲治（男）「そんなことを、・・・そんな事をナオミが云ったんですね？」

浜田（男）「ええ、云いました。近いうちにあなたに話して、ボクと夫婦になれるようにするから（後略）」

用例6

【場面】 前用例に続く場面である。

浜田（男）「それじゃ河合さんも、今日は会社をお休みになったんですか」

譲治（男）「ええ、昨日も休んじまったんです。（後略）」

以上、男性発話者による「ええ」の用例は、全て敬体の会話体の中で使われていた。「ええ」の直前の会話文に注目すると「今日は会社をお休みになったんですか」のように敬語が使われており、フォーマリティの高い会話文となっていることがわかる。

4-2. 女性発話による「ええ」を含む文の文末に現れる終助詞

女性発話による「ええ」の用例総数 38 例のうち、終助詞「わ」「よ／のよ」「の」が使われている例が 33 例あった。残りの 2 例は「けれど…」で文が終わっていた。その他、後続文は完結していない例、後続文がない例が 3 例あった。33 例中、「わ」で会話文が終わる例が 19 例、「よ／のよ」で終る例が 11 例、「の」で終る例が 3 例であった。終助詞「わ」「よ／のよ」「の」のそれぞれの使用数を整理したものが以下の表 2 である⁶。

表 2：女性発話者による「ええ」と終助詞の共起例

| 用例総数 | 38 |
|-------------------|----|
| 文末に終助詞「わ」が現れる例 | 19 |
| 文末に終助詞「よ／のよ」が現れる例 | 11 |
| 文末に終助詞「の」が現れる例 | 3 |
| 文末に「けれど…」が現れる例 | 2 |
| その他、後続文がない例など | 3 |

以下、「わ」「よ／のよ」「の」それぞれの終助詞が使われている用例を示す。

用例 7

【場面】 譲治とナオミが結婚して 2 年ほど経った頃、ナオミのダンス仲間の男子大学生がダンス倶楽部を作るといい、ナオミは譲治も倶楽部に入ると誘う。

譲治 (男) 「僕も倶楽部へ這入れるのかい？」

ナオミ (女) 「ええ、誰だって這入れるわ」

用例 8

【場面】 ナオミは譲治をダンスホールに誘うが、譲治は躊躇する。するとナオミは、譲治が行かなくても、他の男友達を誘って行くという。会話中の「まあちゃん」とはその男友達の中の一人である。

譲治 (男) 「まあちゃんて云うのはこの間のマンドリン倶楽部の男だろう？」

ナオミ (女) 「ええ、そうよ」

用例9

【場面】美しい夜会服に身をつつんだナオミが譲治に肌を剃らせようとする。

譲治 (男) 「条件？」

ナオミ (女) 「ええ、そう。別にむずかしい事じゃないの」

以上のように、女性発話による「ええ」の会話文は、終助詞「わ」「よ／のよ」「の」を伴って使われる傾向が見られた (38 用例中 33 例)。

5. 考察

本調査の結果を以下にまとめる。限られた資料ではあるが、「ええ」の使用における男女差が顕著に出ている。

- ①女性と男性とでは「ええ」の使い方が異なった。
- ②男性は基本的に敬体 (「です・ます」体のフォーマルな会話体) の中で「ええ」を使い、常体 (カジュアルな会話体) の中で使うことは全くなかった。「ええ」の用例 21 例中、すべてが敬体の会話であった。
- ③女性の場合は、「ええ」は敬体 (「です・ます」体) だけでなく、常体 (カジュアルな会話体) の中でも使われていた。「ええ」が常体会話の中で使われていたのは 33 用例だった。一方、敬体会話の中で使われていたのは 3 用例だった。
- ④女性の場合は、終助詞「～わ」「～よ／のよ」「～の」が文末に使われている例が多かった。「ええ」38 用例中、33 用例にこれらの終助詞が見られた。

以下では上記の調査結果について、文体の違い (敬体／常体) および、終助詞との共起という点について考察を進める。

5-1. 性差による文体の異同

本調査では、男性発話の中では、「ええ」は敬体の改まった会話の中で使われている用例しか見つからなかった。一方、女性話者は「ええ」を常体の会話の中でも、また敬体の改まった会話の中でも用いていた。ここで指摘できる明らかな差異は、常体の会話の中で「ええ」を使用するのは女性話者のみであるという点である。あらためて調査結果 (4-1) で示した男性二人の会話 (用例 5) を例にとって見てみよう。

用例5

譲治 (男) 「そんなことを、……そんな事をナオミが云ったんですね？」

浜田 (男) 「ええ、云いました。近いうちにあなたに話して、ボクと夫婦になれるようにするから (後略)」

用例5は男性発話であるが、「ええ、云いました」という形は、男性でも女性でも使用可能である。これを常体に置き換えるとどうであろうか。

用例 5' (一部作例)

譲治 (男) 「そんなことを、……そんな事をナオミが云ったんですね？」

浜田 (男) 「ええ、云った。近いうちにあなたに話して、ボクと夫婦になれるようにするから (後略)」

用例 5' の浜田の発話 (作例) は、男性発話としてはかなりの違和感がある。違和感というより母語話者としての語感からはむしろ非文に近いと言えよう。しかし「ええ、云った」は女性発話としては可能である。このように、「ええ+常体」の形は、男性発話としては非文であり、女性発話としては自然であるということがわかる。

5-2. 「ええ」と終助詞との共起

本調査では、女性の場合は、終助詞「～わ」「～よ/のよ」「～の」が文末に使われている例が多かった (38 用例中、33 用例)。「ええ+わ」「ええ+よ/のよ」「ええ+の」は女性特有の発話であり、女性発話による「ええ」には、終助詞が大きく関連していると考えられる。以下では、終助詞「わ」「よ/のよ」「の」との関係という点に着目して女性発話による「ええ」について考察を進める。

終助詞「わ」「よ/のよ」「の」は、現代日本語では一般的に女性言葉として捉えられている。益岡・田窪 (1922) らは、終助詞「わ」を女性的特徴を表す言葉として分類している。しかしながら、中村 (2013) も指摘するように、現代の日本女性がこれらの女言葉を使わないことは、多くの実証研究によって明らかにされている。金水 (2003) もまた、「てよだわ」に象徴される、近代的〈女性語〉は衰微にあると述べ (p.172)、「動詞+わ」などについて、いわゆる「お嬢様ことば」の典型として多用される表現の一つとして挙げている (p.130)。

つまり「わ」「よ/のよ」「の」などの終助詞は、実生活で使われる女性言葉というよりも、むしろ女性性を表現する一種の「役割語」としての機能を有していると言える。金水 (2003) は、役割語について以下のように定義している。

ある特定の言葉づかい (語彙・語法・言い回し・イントネーション等) を聞くと特定の人物像 (年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等) を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。(p.205)

今回の調査結果において、女性発話による「ええ」の会話例が、女性語とされる終助詞「わ」「よ/のよ」「の」等の女性語を文末に多く伴うことが見出されたことから、「ええ」もまた女性性を表象する役割語としての側面を有しているのではないかと考えられる。

上述 (2-2) で触れたように、筆者らが 2009 年に実施した漫画を使用した調査では、漫画の吹き出しを一部空欄にし、「はい」「ええ」のどちらが入るかを問うた。その際に「ええ」を選んだ理由として「お蝶夫人だから」という被験者のコメントがあった。「お

蝶夫人だから『ええ』を使う」という回答からは、被験者が「ええ」という表現から「お蝶夫人」という特定の人物を想起したことがうかがえ、この被験者にとっては「ええ」が一種の役割語として機能していると考えられる。

これまでの役割語研究においては、感動詞「あら」「まあ」などの女性的表現、応答詞「ふむ」などの老人的表現には注目しているが（金水 2003、メイナード 2013）、「ええ」には注目していない。しかしながら今回の調査結果では、女性発話による「ええ」の会話例において、女性語とされる終助詞「わ」「よ／のよ」「の」等の女性語が文末に多く見られた。このことから、「ええ」もまた女性性を表象する役割語としての側面を有しているのではないかと考察に至った。

最後に本調査結果について、筆者らのこれまでの調査結果との関連から以下に再考察を試みる。

金山・二宮は、「ええ」を使用する決定要因の幅広さ（「はい」との比較において）は、「肯定・同意機能（yes）」に「様々な感情が添加される」側面があるためではないかと考察し、「ええ」の機能を「Yes+ α 」と命名した（2009）。

本調査では、さらに、女性発話者が終助詞「わ」「よ／のよ」「の」と共に使用する「ええ」には、女性性を表象する役割語的側面があるのではないかと考察した。つまり（「はい」との比較において）「ええ」を選択する理由（要因）には、「話者の感情」だけでなく、「女性キャラの発動」も添加されるということである。

まとめると、「ええ」には、①「先行研究で指摘されている肯定・同意応答機能（「従来の範囲」）」に加えて、②「『他の意見・感情』が添加される部分」がある。そしてさらに本研究で明らかになった③「役割語的側面」もあるのではないかと推察される。②、及び③の存在が、（「はい」との比較において、）「ええ」の解釈やイメージの幅広さを生み出しているのではないかと、というのが本調査を通して、新たに得られた知見である。

6. 今後の課題

本稿では、「ええ」の機能について、文学作品の中での男女差に着目し、その異同を分析・考察した結果、女性発話による「ええ」には女性語としての役割語的機能があることが示唆された。ただし、今回は大正時代という特定の時代の、一作家による一作品からの用例分析であるため、今後さらに幅広い時代、作家、作品を網羅したデータ収集に基づく調査分析が課題である。具体的には、コーパスの用例分析を通して、「ええ」の使い方が女性と男性とでどのように異なるかを観察し、従来の先行研究では網羅されていない「ええ」の機能について、さらに検討を加えたいと考えている。

注

1. 高橋（1999）は「外心的」「内心的」について以下のように説明している。「外心的」とは、社会の視点・観点からなされる言語表現、あるいは、少なくとも話者が話し相手や社会の視点・観点到配慮しておこなう言語表現のことである。一方、「内心的」とは話者の視点あるいは話者の主観からなされるものである（p.4）。
2. 「お蝶夫人」とは、山本鈴美香原作のスポーツ漫画『エースをねらえ！』の主要人物

の一人である。高いレベルを誇る高校テニス部に在籍し、父親は庭球協会理事である。非常にプライドが高いお嬢様として描かれている。

3. 「サザエ」とは長谷川町子の手がけた新聞掲載の4コママンガ（後に映像化され、現在もテレビで放映されている）の中の主人公である。3世代家族で、サザエは子育て中の主婦であり、そそっかしいが明るい性格として描かれている。
4. 「はい」「ええ」の選択理由として、「イメージ」に関わるコメントを回答した被験者は28名中25名いた。その内訳は、「はい」を選択した理由として「イメージ」を挙げた被験者が6名、「ええ」を選択した理由として「イメージ」を挙げた被験者が19名だった。
5. 以下のように文が完結していない用例と後続文がない例については、常体が敬体か判断できないため集計に入れていない。「ええ、どうぞほんとに…」 「ええ、猿でも」「ええ」
6. 「ええ」の直後に続く文の文末に現れる終助詞のみをカウントした数である。以下のような例は1とカウントした。「ええ、独りよ、誰も遊びに来なかったわ」

参考文献

- 石田浩二 (2005) 「ニュージーランド人日本語学習者の相づち『ええ』についての知識—母語話者と学習者の解釈の比較—」『日本語教育研究』127号 pp.1-10 現代日本語研究会編
- 尾崎善光 (2011) 『合本 女性のことば・男性のことば (職場編)』現代日本語研究会編
- 金山泰子・二宮理佳 (2007) 「『はい』『ええ』の使い分けに関する意識調査」『ICU日本語教育研究3』pp.3-31 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 金山泰子・二宮理佳 (2009) 「『はい』『ええ』の使い分けに関する調査—漫画を使用したアンケートを通して—」『ICU日本語教育研究5』pp.19-44 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 金山泰子・二宮理佳 (2013) 「『ええ』の機能に関する考察—文学作品の用例分析を通して—」『ICU日本語教育研究9』pp.33-46 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 北川千里 (1977) 「『はい』と『ええ』」『日本語教育』33号 pp.65-72 日本語教育学会
- 金水敏 (2013) 『バーチャル日本語役割の謎』岩波書店
- 高橋潔 (1999) 「日本文化キー・ワード概念にからむ語用論」『社会言語科学』第1巻第2号 pp.2-12
- 富樫純一 (2002) 「『はい』と『うん』の関係をめぐって」定信利之編『『うん』と『そう』の言語学』pp.127-157 ひつじ書房
- 富樫純一 (2013) 「感動詞・応答詞の分析手法」『日本語学 特集ことばの名脇役たち』2013年4月臨時増刊号 vol.32-5 pp.26-35 明治書院
- 中村桃子 (2013) 「翻訳がつくる日本語—ヒロインは「女ことば」を話し続ける」白澤社
- 二宮理佳・金山泰子 (2006) 「『ええ』の機能についての一考察—『はい』との比較を通して—」

- 『ICU 日本語教育研究 2』 pp.51 – 63 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 二宮理佳・金山泰子 (2008) 「初級教科書に現われる『ええ』についての調査報告—初級における応答表現指導についての一考察—」『ICU 日本語教育研究 4』 pp.39 – 57 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 二宮理佳・金山泰子 (2010) 「『はい』『ええ』の使い分けに関する考察—テレビ映像を使用したインタビュー調査を通して—」『ICU 日本語教育研究 6』 pp.3 – 13 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 日向茂男 (1979) 「談話における『はい』と『ええ』の機能について」『国立国語研究所報告』 65号 pp.215 – 229 国立国語研究所
- メイナード・K・泉子 (2013) 「あいづちの表現性」『日本語学 特集ことばの名脇役たち』 2013年4月臨時増刊号 vol.32 – 5 pp.26 – 35 明治書院
- McGloin, Naomi H. (1991) Hai and Ee : An Interactional Analysis. *Japanese/Korean Linguistics*.

資料1:「痴人の愛」 応答表現用例 * 資料中、女性発話に現れる終助詞「わ」「よ/のよ」「の」を太字で示した。

発話者: ナオミ (女)

| 頁 | 行 | 発話の相手 | 性別 | 先行文 | 応答表現 | 応答表現+後続文 |
|-----|----|-------|----|--|------|--|
| 12 | 12 | 譲治 | M | そのくせ私が誘うときは決して「いや」とは言いませんでした。 | ええ | 「ええ。行ってもいいわ」と、素直に答えて、何処へでも附いて行くのでした。 |
| 14 | 10 | 譲治 | M | 「ナオミちゃん、お前おなかが減ってやしないか?」 | ええ | 減っているときは遠慮なく「ええ」と云うのが常でした。 |
| 16 | 16 | 譲治 | M | 「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待っただろう」 | ええ | 「ええ、待ったわ」 |
| 18 | 16 | 譲治 | M | 「まあ、いいだろう、此処で少うししゃべって行っても。一今夜はあまり忙しくもなさそうだから」 | ええ | 「ええ、こんなことはめったにありはしないのよ」 |
| 19 | 4 | 譲治 | M | 「じゃあナオミちゃんは、本を読むのが好きなんだね」 | ええ | 「ええ、好きだわ」 |
| 20 | 14 | 譲治 | M | 「ああ、ほんとうも。だがナオミちゃん、もしそうならば此処に奉公している訳には行かなくなるが、お前の方はそれで差し支えないのかね。お前が方奉公を止めていいなら、僕はお前を引取って世話をしてみてもいいんだけど、……そうして何処までも責任を以って、立派な女に仕立ててやりたいと思うんだけど」 | ええ | 「ええ、いいわ、そうしてくれれば」 |
| 21 | 2 | 譲治 | M | 「じゃ、奉公を止めると云うのかい?」 | ええ | 「ええ、止めるわ」 |
| 30 | 7 | 譲治 | M | 「ナオミちゃん、もう起きたかい」と、私が云います | ええ | 「ええ、起きてるわ、今もう何時?」と、彼女が応じます。 |
| 30 | 12 | 譲治 | M | 「じゃ仕方ない、炊いてやろうか。面倒だからそれともパンで済ましてどうか」 | ええ | 「ええ、いいわ、だけど譲治さんは随分ずるいわ」 |
| 35 | 4 | 譲治 | M | 「じゃ、別に淋しくはなかったらうね」 | ええ | 「ええ、別に淋しいことなんかなかったけれど、……」 |
| 36 | 15 | 譲治 | M | 「内の評判はどうだった、見立てが上手だと云わなかったかい」 | ええ | 「ええ、云ったわ、一悪くはないけれど、あんまり柄がハイカラ過ぎるって、一」 |
| 37 | 2 | 譲治 | M | 「おっ母さんがそう云うのかい」 | ええ | 「ええ、そう、一内の人たちにやなんにも分かりやしないのよ」 |
| 51 | 7 | 譲治 | M | 「捨てるなんて、一そんなことは決してないから安心おしよ。ナオミちゃんには僕の心がよく分っているだろうが、……」 | ええ | 「ええ、そりゃ分っているけれど、……」 |
| 52 | 8 | 譲治 | M | 「お前の望みは何でもきくと聴いて上げるから、お前ももっと学問をして立派な人になっておくれ。……」 | ええ | 「ええ、あたし生懸命勉強しますわ、そしてほんとに譲治さんの気に入るような女になるわ、きつと……」 |
| 87 | 9 | 譲治 | M | 「僕も倶楽部へ這入れるのかい?」 | ええ | 「ええ、誰だって這入れるわ。(後略)」 |
| 110 | 12 | 譲治 | M | 「まあちゃんて云うのはこの間のマンドリン倶楽部の男だろう?」 | ええ | 「ええ、そうよ、(後略)」 |
| 132 | 15 | 譲治 | M | 「あの女はあれでもお嬢さんなのかね?」 | ええ | 「ええ、そうよ、まるで淫売みたいだけれど、……」 |
| 134 | 5 | 譲治 | M | 「へえ、浜田君は綺羅子を知っているのかい?」 | ええ | 「ええ、知っているのよ、あの人はダンスが巧いもんだから、方々で女優と友達になるの」 |
| 145 | 12 | 譲治 | M | 「そう云えば何だね、今ピンク色は西洋人と踊っていたようだね」 | ええ | 「ええ、そうなのよ、それが滑稽じゃあないの、一」 |
| 151 | 14 | 菊子 | F | 「あら、猿を飼っていらっしやいますの?」 | ええ | 「ええ、飼っておりますの、菊子さんは猿がお好き?」 |
| 176 | 7 | 譲治 | M | 「呆れたもんだね、まさに海豹に違いないね」 | ええ | 「ええ、海豹よ、今海豹が氷の上で休んでるところよ。」 |
| 201 | 6 | 譲治 | M | 「今日も独りで留守番かね?」 | ええ | 「ええ、独りよ、誰も遊びに来なかったわ」 |
| 201 | 15 | 譲治 | M | 「ああ、そう云えばそんな風だったね。ダイヤモンド・カフェにいた時分なんか、仲間の者ともあんまり口を利かないで、少し陰鬱くらいだったね」 | ええ | 「ええ、そう、あたしはお転婆なようだけれど、ほんとうの性質は陰鬱なのよ。一陰鬱じゃいけない?」 |
| 207 | 11 | 譲治 | M | 「しかし、そこがお前の気に入るかどうか見て来ないじゃあ、……」 | ええ | 「ええ、あたし明日でも行って見て来るわ、そしてあたしの気に入らたら極めてもいい?」 |
| 236 | 3 | 譲治 | M | 「よし! それじゃ飽くまで潔白だと云うんだな?」 | ええ | 「ええ、潔白だわ」 |

| | | | | | | |
|-----|----|----|---|---|----|--|
| 236 | 5 | 譲治 | M | 「お前はそれを誓うんだな！」 | ええ | 「ええ。誓うわ」 |
| 275 | 6 | 譲治 | M | 「よし！直ぐに出て行け！」 | ええ | 「ええ、直ぐ行くわ、一二階へ行って、着替えを持って行っちゃあいけない？」 |
| 327 | 6 | 譲治 | M | 「じゃあその鍵を置いて行っておくれ」 | ええ | 「ええ、置いて行くわ」 |
| 329 | 8 | 譲治 | M | 「そういつまでもお前の物を置いとく訳には行かないんだから」 | ええ | 「ええ、いいわ、直き取りに来るわ」 |
| 347 | 4 | 譲治 | M | 「見やしないけど、着物の上かかれでも大概分るさ。先から出っ臂だったけど、このごろは又膨れて来たね」 | ええ | 「ええ、膨れたわ、だんだんお臂が大きくなるわ、」 |
| 347 | 8 | 譲治 | M | 「うん、脚は子供の時分から真っ直ぐだったね。立つとビタリと喰っ着いたけれど、今でもそうかね」 | ええ | 「ええ、喰っ着くわ」 |
| 360 | 12 | 譲治 | M | 「ははあ、そうか、お前の顔がこの間から面変わりがして、眉の形まで違っちゃったのは、そこをそんな風に剃っているせいかな」 | ええ | 「ええ、そうよ、今頃になって気が付くなんて、時勢遅れね」 |
| 362 | 14 | 譲治 | M | 「条件？」 | ええ | 「ええ、そう。別にむずかしい事じゃないの」 |
| 366 | 5 | 譲治 | M | 「え、腋の下？」 | ええ | 「ええ、そう、一洋服を着るには腋の下を剃るもんよ、此処が見えたら失礼じゃないの」 |
| 370 | 2 | 譲治 | M | 「へえ、熊谷と絶交した？」 | ええ | 「ええ、した、あんなイヤな奴はありやしないわ。—これから成るべく西洋人と付き合うの、日本人より面白いわ」 |

発話者：杉崎女史 (女)

| | | | | | | |
|-----|----|--------------|---|--|----|--------------------|
| 102 | 16 | ジェームス・ブラウンの妻 | F | 「あなた、失礼でございますけれど、ダンスのお稽古をなさいますのは、フォイスト・タイムえいらっしゃいますの？」 | ええ | 「ええ、お始めてなのでございますの」 |
|-----|----|--------------|---|--|----|--------------------|

発話者：綺羅子 (女)

| | | | | | | |
|-----|----|----|---|------------------------------|----|-----------------|
| 156 | 15 | 浜田 | M | 「駄目なことがあるもんですか。(中略) ねえ綺羅子さん」 | ええ | 「ええ、………どうぞほんとに」 |
|-----|----|----|---|------------------------------|----|-----------------|

発話者：菊子 (女)

| | | | | | | |
|-----|---|-----|---|------------|----|----------|
| 152 | 1 | ナオミ | F | 「そうして猿でも？」 | ええ | 「ええ、猿でも」 |
|-----|---|-----|---|------------|----|----------|

発話者：譲治 (男)

| | | | | | | |
|-----|----|-------|---|--|----|--|
| 66 | 9 | ハリソン嬢 | F | 「日本人、(中略) そしてリーディングが上手ですから、今にきっと巧くなります」 | ええ | 「ええ、ほんとうにそれはそうです、あなたの仰っしゃるとおりです。それで私も分りましたから安心しました。」 |
| 178 | 12 | 浜田 | M | 「どうですか河合さん、ほんとに寝像が悪いですか」 | ええ | 「ええ、悪いですよ。それも一と通りじゃありませんよ」 |
| 246 | 2 | 浜田 | M | 「それじゃ河合さんも、今日は会社をお休みになったんですか」 | ええ | 「ええ、昨日も休んじゃったんです。会社の方もこの頃は(後略)」 |
| 249 | 2 | 浜田 | M | 「(前略) 河合さんとナオミさんとは、御親戚とというような訳じゃないんですか？」 | ええ | 「ええ、親戚でもなんでもありません。(後略)」 |
| 249 | 6 | 譲治 | M | 「そうして今じゃ、結婚なすっていらっしゃるんですね？」 | ええ | 「ええ、そうなんです。両方の親の許しを得て、立派に手続きを踏んであるんです。(後略)」 |
| 293 | 4 | 浜田 | M | 「あなたは、河合さんですか、あの大森の？」 | ええ | 「ええ、そうですよ、僕は太森の河合ですよ、(後略)」 |

発話者：浜田 (男)

| | | | | | | |
|-----|----|----|---|--------------------------------|----|--|
| 238 | 9 | 譲治 | M | 「裏口だって、錠がおりていた筈だけれど、………」 | ええ | 「ええ、僕は錠を持っているんです。—」 |
| 239 | 15 | 譲治 | M | 「え？ナオミと此処で逢う約束に？」 | ええ | 「ええ、そうです、………それも今日だけじゃないんです。今まで何度もそうしてたんです。………」 |
| 241 | 6 | 譲治 | M | 「(前略) 花壇のところで君がナオミと立ち話をしてたのは？」 | ええ | 「ええ、そうでした、かれこれちょうど一年になります。—」 |
| 241 | 16 | 譲治 | M | 「ふん、じゃ、ナオミの方から遊びに来いと云ったんですかね？」 | ええ | 「ええ、そうでした。(中略) もうその時はどうすることも出来なくなっていたのです」 |
| 244 | 2 | 譲治 | M | 「ナオミは君に見られたことを、知っているのでしょうか？」 | ええ | 「ええ、知っています。僕はその後ナオミさんに話したんです。そして是非とも熊谷と切れとくれろと言ったんです。(後略)」 |

| | | | | | | |
|-----|----|----|---|---|----|--|
| 244 | 14 | 譲治 | M | 「そんな事を、……そんな事をナオミが云ったんですね？」 | ええ | 「ええ、云いました。近いうちにあなたに話して、僕と夫婦になれるようにするから (後略)」 |
| 252 | 3 | 譲治 | M | 「どうか、浜田君、これから後も君だけは遊びに来てください。(後略)」 | ええ | 「ええ、だけれど当分は伺えないかも知れませんよ。」 |
| 294 | 8 | 譲治 | M | 「西洋人が？……」 | ええ | 「ええ、そうですよ、そうして大そう立派な洋服を着ていましたよ」 |
| 296 | 4 | 譲治 | M | 「(前略) 君が調べてくださる方がいろいろ手？がおありになりはしないかと、そう思うもんですから、……」 | ええ | 「ええ、そりゃ、僕が調べれば直きに分るかも知れませんがね」 |
| 302 | 2 | 譲治 | M | 「(前略) 分りましたか？」 | ええ | 「ええ、分ることは分りましたが、…… (後略)」 |
| 303 | 13 | 譲治 | M | 「それじゃ、あの日に又彼処へ行ったんですか」 | ええ | 「ええ、そうだって云うんですよ。(後略)」 |
| 310 | 12 | 譲治 | M | 「(前略) 川崎の方へ行って見ましょうか」 | ええ | 「ええ、いいでしょう、それなら一番安全です」 |
| 315 | 2 | 譲治 | M | 「するとあの時の連中は、一人残らず？」 | ええ | 「ええ、そうですよ、(後略)」 |
| 317 | 8 | 譲治 | M | 「あの時の君の話だと、ナオミを自由にしているものは熊谷だと云うー」 | ええ | 「ええ、そうでした、僕はあの時そう云いました。(後略)」 |

発話者：ナオミの兄 (男)

| | | | | | | |
|-----|---|----|---|------------------------------|----|--------------------------|
| 289 | 3 | 譲治 | M | 「(前略) 早速どうか僕の所へ知らして戴きたいんですが」 | ええ | 「ええ、そりゃあもう、(中略) 知らせますがね」 |
|-----|---|----|---|------------------------------|----|--------------------------|

Aspect of the Responsive Expression, “*ee*” through Literature: A Reading of “*Chijin no Ai*” by Junichiro Tanizaki

Yasuko KANAYAMA, Rica NINOMIYA

This research examines the gender differences regarding the response “*ee*” and its characteristics as uttered by women throughout the novel “*Chijin no ai*” written by Junichiro Tanizaki.

The results show that “*ee*” uttered by women is used in both everyday conversations and formal conversations, whereas “*ee*” uttered by men is limited to the latter. Moreover, “*ee*” uttered by women is often followed by sentence-final particles, “*wa*,” “*no/noyo*,” and “*no*,” which carry out the function of a feminine role language. This relationship between “*ee*” and these particles indicates that “*ee*” may function as a role language.